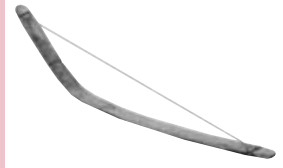


財団だより

第104号

2004.12

多摩川



魚追い寄せ具・ペラ
鈴木由太郎蔵



多摩川八景 その③

Photo & Text : 遠藤顕彦 (Hidehiko Endo)

多摩川の河口

六郷橋下辺りから大師橋を経て、東京湾に至る河口域は、川幅が広く、満々と湛えられた水がそのまま海に注いでいる。広いヨシの群落では、ここを棲み家とする野鳥が飛び交い、生態系保持空間として保護されている河口干潟では、カニなどの生き物たちが動き回っており、豊かな自然に出会うことができる。

河口域右岸には製造工場が連なり、石油精製塔からの赤い炎が天に届けとばかりに燃え上がっているのが見える。また、多摩川の基点である河口原点の金属票が設置されている。河口域左岸では、六郷水門、大師橋、「羽田の渡し跡の碑」などを経て、やがてモノレールの電車越しに、ジャンボ機がひっきりなしに離着陸する羽田空港の新しいビル群と広々とした敷地が目

飛び込んでくる。平成9年に完成した瀟洒な斜張橋の大師橋は、現在、渋滞緩和と補強の為の整備工事が行われている。最寄駅は、京急の六郷土手、小島新田など。

Contents 目次

自然の循環に思いを	2
水そして生命・健康を考える	3
多摩川を真の体験の場に	4
こだいらグリーンロード21km	5
多摩川の昆虫覚書き	6
助成研究ワークショップのご報告	7
研究助成成果報告書が完成②	8
平成17年度助成研究募集のご案内	9
研究助成成果報告書が完成②つづき	10

巻頭言

自然の循環に思いを



毎日新聞学芸部
中島みゆき

昨年4月から1年間、日曜版一面の「生命の旋律」という連載を担当した。「生命の旋律」というタイトルに託したのは、水の音。雨が降り、地に注ぎ、生き物の体をめぐり、川に流れる……そんな循環を見直せたら、という思いだった。「豊かさ」をテーマに撮り続けている写真家の本橋成一さんと各地を歩き、自然の中で生きる人や、無形の知恵を受け継ぐ人を写真に収めた。

バブル最盛期に学生生活を送った私がなぜこんな連載を企画するに至ったのかを考えると、いくつかの出来事が影響しているように思う。

大学に通うために群馬から上京して最初に感じたのは、水とトマトがおいしくないことだった。窓を開けても山が見えないこと、飲み水や食べものがどこから来ているのか実感がないこと、生命感が希薄なことに、時折不安を覚えた。

千葉支局で過ごした駆け出し時代、台風の日に忘れられない事件が起きた。新興住宅地の地下に掘っていた水路に増水した川から水が流れ込み、作業員7人が閉じ込められた。急激な都市化によって行き場を失った雨水が氾濫する都市型洪水を防ぐための治水工事だった。生存が絶望視される中での救出作業を、何日も見守った。「小さな幸せ」を絵にしたような住宅が並ぶ地上の光景を見ながら、地下トンネルの中で断ち切られた7つの人生を思うと、やりきれない気持ちになった。

何かが違う……。そんな思いを決定的にしたのは、97年に取材した地球温暖化防止京都会議だった。経済部記者として先進国の閣僚や官僚を追いかけいていた私を、南太平洋の小さな国の関係者が呼び止めた。「この会議は経済大国によるパワーゲームかもしれない。でも、私の国の小さな島は、このままでは水没してしまうのです」と。大量消費・大量廃棄の生活には限界があること、無意識であれ環境を害することが未知の他者の生活を脅かしていることを、改めて思い知らされた。

この10年、私は小金井に住んでいる。崖線から湧いた水が野川となって流れ、玉川上水沿いには木々が茂っている。置き売りの簡易野菜販売所に100円玉を入れて採れたての野菜を持ち帰ると、信頼の輪の中に入れてもらえたような気持ちがある。多摩川流域の恵みを受けていると思う。

その一方で気になることもある。ここ数年、畑や屋敷林が次々と建売住宅や駐車場に変わってきている。マンションも増えた。柔らかな土がアスファルト舗装の下に隠れ、野川の水も心なしか減っているように見える。多摩川全体で考えても、状況は日々厳しくなっているように感じる。

「大手町へ〇分、新宿へ〇分」というように、都会の暮らしは点によって成り立っている。私のように他の土地で育った者には、「流域」という概念を持つことは難しい。けれども、点の思考による生活には、限界が見えている。自分の住む環境を流域全体で捉え、自然の循環を保とうとする意志が、持続可能な未来を創るのだと思う。

白神のブナ林、綾の照葉樹林……。『生命の旋律』の紙面を飾った美しい自然も、実はさまざまな問題に直面している。だからこそ、その土地を愛し次代に伝えようとする人々の表情を、私は美しいと思った。地を知ること、川を知ること、身の周りの自然や人の営みを知ることによって、人は真に豊かに暮らせるのだと、私は信じている。

《寄贈文献の紹介》

- 「多摩川橋めぐりー太師橋から日野橋までー」
 - 「続多摩川橋めぐりー立日橋から御岳橋までー」
- 文 島田良夫 写真 島田美知子
上 2001年 下 2004年 (株)けやき出版

上は14橋、下は18橋について、橋本体と周辺の神社仏閣、博物館・美術館、公園、自然景観等を写真構成で紹介している。橋については竣工年、河口からの距離、橋長、幅員等が表示されている。

また、橋を中心とした周辺地図が見開き2頁に描かれていて、各々の位置関係が分かり易い。

- 「大気環境の変化(岩波講座 地球環境学3)」

著者 安成哲三・岩坂泰信・中澤高次・原 宏・住 明正・森田恒幸・米本昌平 1999年 (株)岩波書店

第1章は大気的主要成分(特に二酸化炭素、酸素、窒素)の役割、第2章は人間活動が大気に与えている影響、第3章は温室効果ガスの増加の実態、第4章は酸性雨やオゾン層破壊のメカニズム、第5章は地球の気候システムの将来予測、第6章は温暖化対策の経済コスト予測、第7章は地球環境問題と国際政治の融合、第8章は新しい科学技術のあり方の模索について各専門家が分執した。

特別寄稿

水そして生命・健康を考える

—水の生命科学館の建設を夢みて—



千葉大学大学院医学研究院
環境影響生化学

教授 鈴木 信夫

川は人間活動のバロメーターでしょうか？ そのような疑問が、頭の中をふとよぎります。晴れた日、多摩川沿いを上流から下流へ散策すると、透明な川の水は小作あたりで白く濁り、しだいに緑灰色へと推移するのです。

さて、そのような多摩川の水は浄化され、私達の飲用水となっていますが、私達の体の中で、どのような生理反応を引き起こしているのでしょうか。この疑問に答える生命科学は、残念ながら、未だ発展途上中です。たしかに、水に含まれる個々の成分については、水質検査などの様々な観点から調査されています。しかしながら、私達は、水の種々の成分を一つ一つ振り分けて飲用しているわけではありません。成分の総体としての“水”を毎日毎日体へ注ぎ込んでいるのです。

そこで、飲み水が私達人間の生命活動にどのように影響しているのか、その実態を明らかにしようとするのが、私達の研究のネライです。幸い、私共では種々の環境有害因子に超高感度で反応する、世界でも類まれな実験システムを開発しています。このシステムを応用利用して、飲用水により体の中の細胞が死にやすくなるはならないか、細胞の所有している遺伝子に傷害が与えられてはいないか、等々を調べながら、併せて取水場近くの多摩川の水を対象に、その採取水の生物作用も調査していますが、必ずしも安閑としてはられない実験結果が出てきつつあります。

こうした調査、研究の成果を、速やかに社会へ還元していくことも大切で、その為には、成果の内容を正しく判断し、問題があればそれに適切な対処をする人材の教育が必要です。この要求に応えるため、私達は、水、緑そして人の癒しに関わることなどに従事している人々と連携して、教育講演活動も行っています。研究の内容を充実させるため、水については、多摩川以外の川の水や湧水、海水という視点からも研究と教育の活動をしています。本年度は、千葉県船橋市を皮切りに、山梨県長坂町にある三分一湧水館（9月）、昭島市市民ホール（10月、昭島水道50周年記念事業のひとつとして）、あきる野市自然休養村（11月）で

講演会を実施してきました。八ヶ岳山麓でも1、2の湧水量を誇る三分一湧水では、「水そして私達の健康を考える集い」と題し、これまでの実験結果の報告（写真）をしました。地元で小学生に水質検査を教えている草野香寿恵さんの協力をえ、約80名という多数のご参加を戴きました。希望者には、日々摂取している飲用水と自らの血液について、細胞や遺伝子に対する毒性の調査、或いは、湧水館の脇にある三分一湧水公園を散策して貰った上でのストレス解消度検査等を実施しました。この教育講演活動—水の生命科学講座—は、健康調査や水の癒し効果に関する検査なども行えるよう、内容を更新中です。来年1月には、八王子市との共催によるシンポジウムを、また、4月には、千葉大学・けやき会館で、環境水というテーマの学術講演会を準備中です。このような講演会等の参加者の中から、私達の研究室で行われる、水の生命科学実験を修得する人々を募ります。多摩川の水と飲用水を守るための社会人コーディネータの養成とでも言うべきものです。次世代のための水の生命科学教育の要となる人材の育成と言えるでしょう。

以上のような研究・教育・地域貢献といった三位一体の活動を通して、人間活動の単なる物差しではない、清き水のせせらぎと川辺を彩る四季折々の植物、そして、遂には海へとつらなる大景観—私達の人生そのもの—を永遠に抱擁する多摩川を、子々孫々に伝えていくことを実現する為、水の生命科学館とでも呼ぶべき殿堂を造る必要性を感じています。水が生命活動の根源にあるにもかかわらず、生命と結びつけた水に関わる人々の集いの場がありません。水の生命科学大学などというものもありません。生命科学という視点で多摩川からの水を始めとした、飲用水を守る社会作りの拠点を立ち上げられないかと思うのです。水の生命科学館建設が実現できるよう、これからも三位一体の活動に微力を尽していきたいと思っています。

水の生命科学教育の次世代伝達



三分一湧水館での講演会



多摩川に学ぶ



多摩川を 真の体験の場に

立川市立第七小学校校長
吉岡 一彦

ある日、数人の4年生が声をそろえて「校長先生、お願いがあります。五日市の秋川へ行かせてください。」と言います。

この4年生は6月から総合的な学習の時間『多摩川調査隊』に取り組み、6月の初旬に、本校のすぐそばにある多摩川の日野橋下で、川の水の様子を水棲昆虫の種類で調べる活動をしました。そこで見つけることのできたものは、汚い水に住む指標生物であるイトミミズやヒルなどでした。

子どもたちは、資料に載っている、きれいな水の指標生物である、「ウズムシ」「サワガニ」「カワゲラ」「カゲロウ」等を見つけない、もっときれいな水の流れを探したいと強く願うようになったのです。そこで冒頭のお願いとなったわけです。

しかし、私が日野橋での活動時に感じたことは、子どもたちの川に対する経験や認識が予想以上に少ないことでした。具体的に述べると、今自分たちがいる川の水がどちらからどちらへ流れているのかということや、上流がどちらの方向であるのかなどもわからない子が多数であったことでした。

一般的に私たち指導者は、子どもたちに「環境マインドを育てよう」、「水の汚れの原因を考えさせよう」という目標があるため、どうしても思考の方向付けを急いでしまいがちですが、その前提となる川という自然に対する体験が不足していることの方が重大な問題であると気付きました。

川での諸経験の少ない子どもに川の水質保全の大切さをいくら訴えても、表面上の活動と理解で終わってしまいます。子どもたちの川に対する経験をより質の高いものにして、新しい考え方を個々の子どもの中に成立させたいと、計画を立てました。

いよいよ6月28日には、子どもたちの願い通り五日市の秋川へ出かけてきました。学校を出て、JR五日市駅のすぐそばの川原には1時間で到着します。子どもたちは一目でその水のきれいさに喜びの声を上げました。

初めの30分はオタマジャクシとりや魚とりに夢中になる子や、水に入ることが楽しくて全身で水につかってしまう子など水棲昆虫を探すという目的はどこへやらでした。しかし、私はこの様子こそが、子ども本来の姿なのだとうれしく思いながら監視を続けました。この活動（遊び）そのものが水の冷たさや流れの強さなどを体感して、川を体験することになるのです。

この活動を十分にした後、担任は子どもたちを岸辺に集め、今日の目的の再確認と実際に採集したトビケラ等を見本として確認させました。そして、活動範囲も岸辺の近くだけに限定して活動を再開させました。

今度はどの子も石をひっくり返しては、じっと観察を繰り返します。するとさっきは全く見つからなかった生物が見つかり始めます。ヘビトンボの幼虫やウズムシ（プラナリア）などという、大人でも見たことのない人が多いと思うものも見つかりました。また、石の裏にくっついている巣の中の様子も調べようとする子もいました。確実に観察への関心や意欲が高まったのです。

7月には教室で、子どもが自らの疑問等を調べ、学習新聞にしてまとめました。そこには、水棲昆虫、野鳥、植物、上流・中流・下流の水質の違い、水温、水の汚れと原因、流れの速さの違い、地形等々いくつもの内容が記載されていました。ある子どもの文章の一部を紹介して報告に代えます。

(前半はトビケラについて調べた内容・・・略) このトビケラはきれいな水にしか住むことができません。そのため、多摩川（日野橋付近のこと）に住むことができないのです。だから多摩川を少しでもきれいにしたいな、と思いました。そして、この勉強をしてよかったなと思いました。なぜなら、いろいろな水棲昆虫を見つけられたし、きれいな水にはトビケラが住んでいるなどが分かったからです。この経験を5年生でも生かしたいです。



多摩川散歩

■ こだいらグリーンロード 21km ■

小平市役所 産業振興課 森 琳子

小平グリーンロードは、狭山・境緑道、野火止用水、玉川上水、都立小金井公園を結び、小平市をぐるりと一周する水と緑の散歩道です。この小平グリーンロードの道案内として、マップ「こだいらグリーンロード 21km」を作成しました。

従来のマップを大幅改訂し、見やすさやわかりやすさに重点を置いた、実用的なマップです。B3版に両面フルカラー印刷で、小平の美しい緑を全面に押し出し、淡い色調で仕上げました。

このマップは、実際にグリーンロードを散策する方の立場にたって作成しましたので、おすすめ名所のほか、トイレの位置、交差点の拡大図、ロード沿いの商店街の位置なども盛り込みました。グリーンロードにかかる橋名も一目でわかります。桜の木が植えられている場所も記載されていますので、春には桜マップとして桜めぐりを楽しんでいただけます。

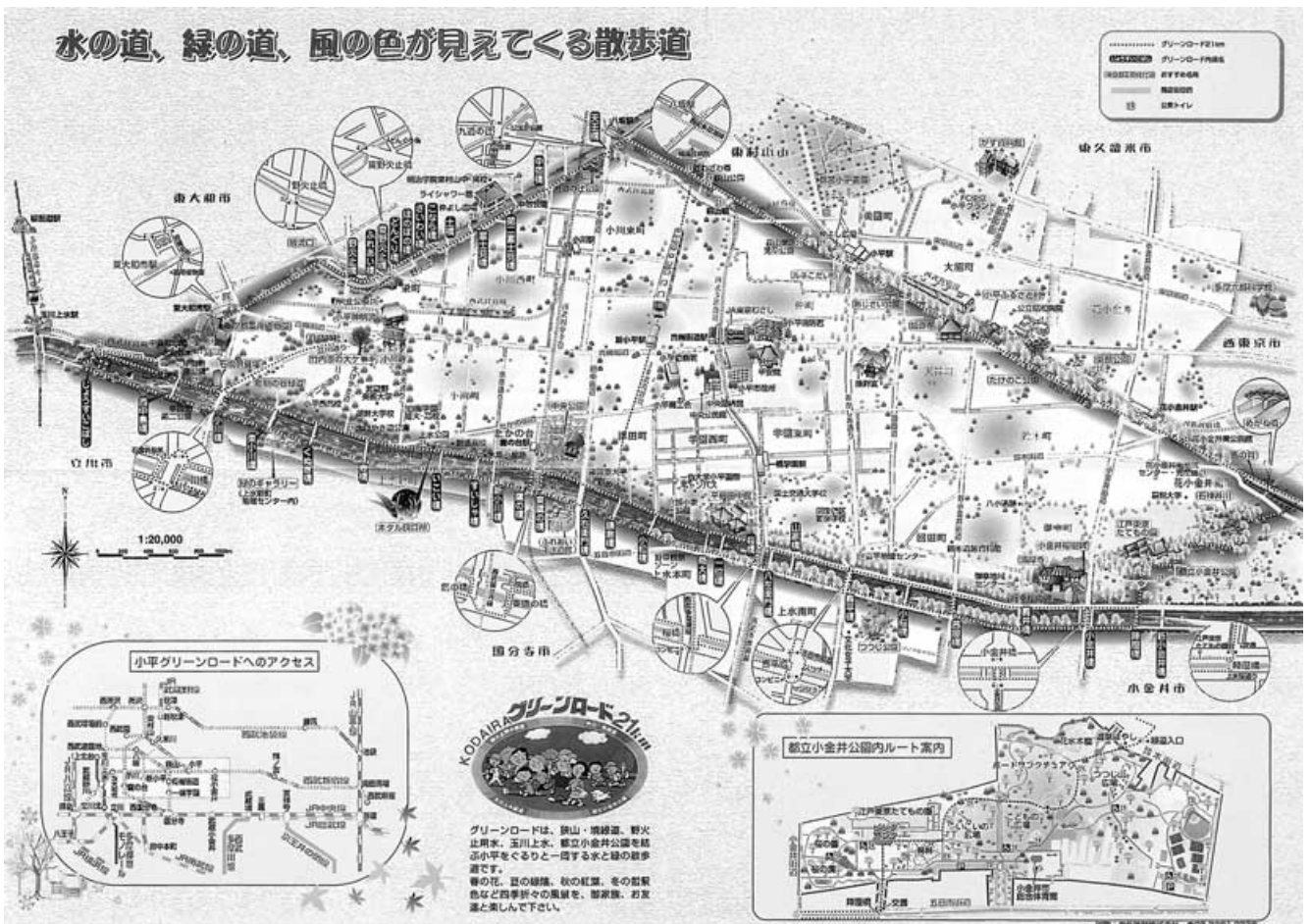
また、正確な縮尺に基づく地図作製をしていますので、実際に歩いた時の距離感の目安などが掴みやすくなっているのが特色です。

マップの表紙と裏表紙に当たる部分には、グリーンロードの緑の美しい写真を多数掲載しました。各写真には番号をふり、地図上にもその番号を記載してありますので、実際に訪ねる際に便利なものとなっています。

なお、グリーンロードへのアクセス方法・都立小金井公園内のロードマップも載っていますので、初めての方でも安心してグリーンロードをお楽しみいただけます。是非一度、小平グリーンロードの豊かな緑とふれあうために、足をお運び下さい。

マップをご希望の方は、小平市役所産業振興課までお電話を。また、小平市役所・東部出張所、同・西部出張所、東京都庁第一本庁舎・観光コーナー、でも配布しています。

小平市役所 生活文化部 産業振興課
042-341-1211 内線 2425
042-346-9581 (直通)



私と多摩川



多摩川の昆虫覚書き 虫たちの栄枯盛衰

東京大学総合研究博物館
協力研究員

須田 孫七

昭和一桁生れの私と多摩川の出会いは何時の日か。記憶の糸をたどると幼稚園の頃、父の自転車に繋がれたリヤカーに乗せられ、がたがたゆらゆら着いた先は稲田登戸の梨畑だった。父の目的は息子に早生梨もぎの体験学習であったと思う。私が喜々としたのは父の意に反し梨の収穫より樹幹や果実に群がるアブラゼミだった。杉並の自宅周辺では蝉は長い柄の網で捕ると相場は決まっていたのに梨畑の蝉は手掴みでいくらでも捕れる。「虫は友達」と自負する私は最高の御機嫌、しばし「梨はいらない・蝉がほしい」の極楽タイム、紙袋に多数の蝉を採集したこの光景は今でも脳細胞に鮮明な記憶として入力されている。

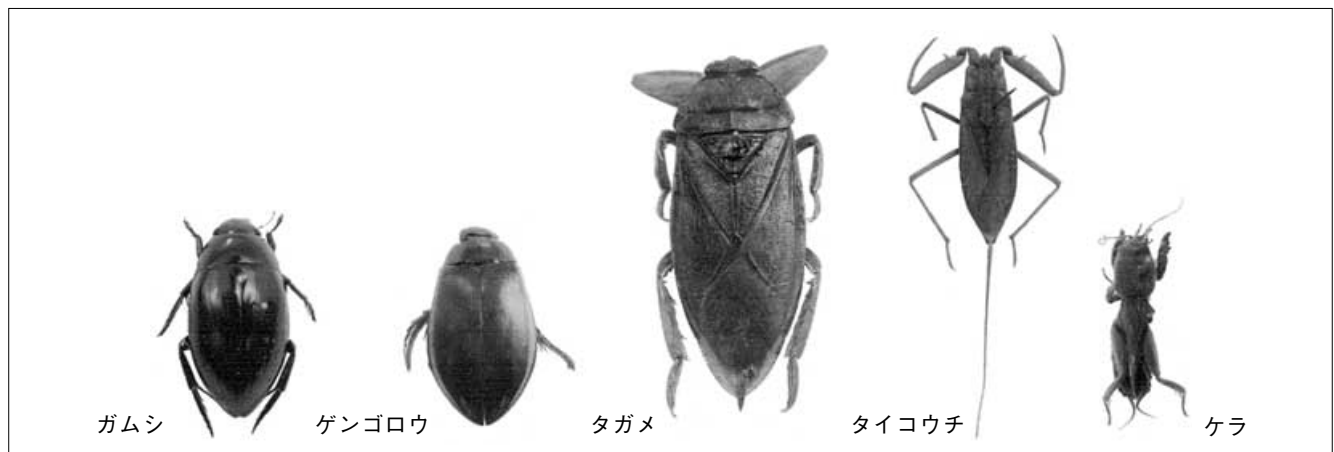
幼児体験を過ぎ小学校時代、多摩川との出会いは？昭和13年・小学校の2年生の遠足が日本陸軍の立川飛行場（現在は昭和記念公園）、お弁当を食べたのが多摩河原、カマキリ、バッタ捕りに興じ、赤い石（チャート）をリュックに詰めおみやげとした。5年生の遠足は聖蹟桜ヶ丘、この時の体験はすばらしかった。多摩丘陵里山散策は夢の連続、担任が理科教員のこともあって「地層をみる」「蛍の幼虫を探す」「カワニナを捕る」、最高の圧巻は溜め池の住人探索、現れたのはタガメ、ミズカマキリ、タイコウチ、コオイムシ、ゲンゴロウ、クロゲンゴロウ、コガタノゲンゴロウ、

ガムシ、オニヤンマのヤゴと水生昆虫のオンパレード。種類も生息密度も最高の溜め池や小流が散在していた。

中学校（旧制）に入りすべての生活が戦時体制となった。学習は午前中、午後は勤労奉仕か教練という軍隊教育、夜は空襲と虫を見る時間は激減した。中学校が農業学校なので勤労奉仕の一つに援農と称し農家のサポートがあった。ある時その行き先が稲田堤の梨畑、幼い頃のアブラゼミの大集団を期待したが発生期がずれて見られない。思い余ってシャベルを借用、ナシの木の周りを掘った。居るは、居るは終令幼虫がゾロゾロ、幼稚園時代とは別体験の興奮を感じ、級友としばし穴掘りに無我夢中、時間を忘れる日となった。

高校時代、聖蹟桜ヶ丘の水生昆虫群が気になり近くの平山城址公園を訪ね樹間に白布を張りその前にアセチレン灯をともし夜間採集を実施した。その夜、飛んできたタガメは60数匹。同じ頃、高尾山ケーブルカー山頂駅は昆虫少年のメッカであった。何となれば駅舎にお願いし、終夜、電灯をつけてもらい「飛んで灯にいる夏の虫」の採集ができるからであった。河川からほど遠く標高の高い駅舎にもかかわらずガムシ、ヒメガムシ、ヘビトンボ類と水に縁のある昆虫が多数飛来するのは不思議な思い出となっている。大学時代の多摩川、印象に残る昆虫は日野駅近くの多摩川堤防上に発生していたシルビアシジミ、ミヤマシジミ、その姿は幻の蝶となってしまった。

筆者の手元には生息の証しとして過去60数年間に採集した東京等の昆虫標本がある。調査研究資料としての標本は私物化すべきではないとの考えから今回その一部、約10万点を東京大学総合研究博物館に寄贈し現在データベース化が進行している。掲載の水辺昆虫写真はすべて多摩川水系産である。ご多忙中標本写真撮影の労をとられた本館・高槻成紀助教授に感謝します。



ガムシ

ゲンゴロウ

タガメ

タイコウチ

ケラ

第10回 助成研究ワークショップのご報告

去る7月29日、「川の風景を読む—多摩川からの報告—」と題した、第10回助成研究ワークショップが、台風の影響を受けた雨模様の中にもかかわらず、96名の方のご参加を得て、青山の国連大学会議場で開催されました。

最初に、真姿の池のすぐ真上に建設中のマンションの販売広告の写真が映し出され、多摩川の貴重な自然の一つである国分寺崖線の湧水群のひとつが危機に直面していることもあり、この6月に景観法案が国会で可決成立した事を活かして、自然と人間が上手く折り合え、共生できる環境を、この多摩川の地に造り出していくには、今、多摩川流域がどうなっており、そこで我々が一体何をすればよいのかを考えるきっかけ作りとして、この題材が取り上げられたとの説明がありました。

続いて、この題材に沿った3件の助成研究の発表が行われました。一番目には、'97から3年間に亘って助成された「多摩川中流域の府中用水に関する調査研究」が、NPO多摩川環境研究会代表の大学講師、島村勇二様から報告され、「江戸時代に自然地形をうまく使って造られた府中用水は、府中などの4村の農業用水路として、生活に密着した重要な役割りを担ったものの、戦後の経済成長に伴い、グリーン廃油やカドニウムによる汚染が続き、家庭からの生活廃水も流れ込むようになって、都市下水路化され、“緑の道”と称して一部は暗渠化され、人々の生活から遠い存在になってしまったが、近年の地方分権により公共水路が市町村のものとなる機会を捉え、農業用水路の市民利用を目指し、身近な水辺に清流を復活しようという動きが生まれ、それが年とともに活発になっている。用水本来の機能の復活はもとより、やすらぎの場、環境学習の場としての用水の復活が期待されている。」と話されました。二番目には、'97から今年まで3度に亘って助成を受けた「多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の地名とその由来に関する調査研究」が、多摩川源流研究所所長の中村文明様から報告されました。多摩川源流域に出入りして、その自然に親しむ中で、市販の地図や釣りの本には、地元で使っている地名が殆ど書き込まれていないこと、またそれらの地名が、単純な推測とは異なる由来によることが多いことを発見し、過疎化や古老の減少がこれ以上進まない内に、地名とその本来の由来を記録する必要性を感じて、この調査研究を始め、その結果を、多摩川源流絵図と題した、塩山・丹波版、小菅版、奥多摩版の3冊の小冊子にまとめられました。「地名には、自然の恵みに対する感謝や愛着、自然への畏敬の念や思い、生活や暮らし、文化や史実といった、実に様々なメッセージが

託されており、地名は無形文化財と言っても過言ではない。」との思いを語られました。三番目には、野川の湧水の保全を目的に、水みち—地下水がゆっくりと流れる水の地下経路—に関して'88から3度に亘って助成された「水みちマップ作成の為の調査研究」について、水みち研究会代表の神谷博様から報告がありました。「国分寺、小金井、調布、国立、府中、狛江、三鷹、世田谷の計8地区の調査によれば、湧水量は減少し続けており、野川も深刻な水枯れに直面するなど、状況はむしろ悪くなってきていること、冒頭説明のあったマンション建設も真姿の池湧水の水みちに当たっており、その影響は無視できないこと、流域でも有名な湧水でさえ開発の嵐にさらされていることは、景観法が地下水の規制にまで言及していないことから、非常事態とあって良いこと、玉川上水とその分水路網の水みちの活用が湧水群の復活に効果的であり、それによって湧水や小さな水路などの国分寺崖線の風景を守ることが急がれること」などが報告されました。ついで、お三方の発表をコメンテーターの中村良夫東工大名誉教授が総括され、「3人3様の研究だが、共通点として、(1)水循環の中の毛細血管的なものを扱っている(2)水の流れの周り(周辺)の事象を見ている(3)水と人(市民)との関わりを対象にしている(4)広い意味で復元に言及している等が挙げられる。要は、3研究とも自然と人間の交差点に生ずる文化現象を対象にしている。ユネスコの世界遺産の第3のカテゴリーとして文化景観があるが、3人の研究もまさにそれを対象にしたもの。」と話された。

ここで約15分の休憩を挟んで、後半の総合討論に移り、島村さんに3件、中村さんに4件、神谷さんに7件の質問や提言がありました。中でも、多摩川流域の湧水量の減少、野川の枯渇は参加者の強い関心と呼んだようです。最後に、中村良夫先生が、「3つの研究は身近な自然に焦点を当て、新しい自然を発見された。身近なものは、人間にとって本質的なものではないと思われ、余り真面目に取り扱われることがなかった。身体で言えば毛細血管にあたる身近な環境を変えていけば、それに関する人間(体にあたる)も変わっていくことになる。それが、人間の生活を豊かにするきっかけにもなる。ご参加の皆様方も、身近なところに目を止め、色々な調査や研究に取り組み、新しい発見をして戴きたい。その際には当財団の助成を活用することも考えたら良い。多摩川流域には、これまでも多くの調査や研究の蓄積があるが、これを更に増やして行って、我々を取巻く環境を少しでも良くして行くことが大切です。」と結ばれた。予定を30分ほどオーバーして、熱心な議論の幕が閉じられました。

財団からのお知らせ — 研究助成成果報告書が完成しました ② —

一般研究第25巻6件の研究助成成果報告書が完成いたしましたので、それらの概要をご紹介します。なお、これ迄研究成果報告書は製本のみしていましたが、この度、過去の全ての成果を含めてCD-ROM形式での記録が完成致しました。財団にお越し下されば、製本形式でも、CD-ROM形式でもお貸し出し致しますので皆様のご活用をお待ちしております。

一般研究

角田清美（東京都立北多摩高等学校教諭）

「多摩川流域と他地域の古井戸についての比較研究」

- (1) 御岳御師集落は、標高930mにある御嶽神社の御師たちが居住する集落である。山頂直下に位地しているため生活用水には恵まれないが、集落内には9ヶ所に古井戸があり、昭和17年頃まで利用されていた。
- (2) 武蔵野台地の西端付近には、青梅市の新町の大井戸、羽村市の五ノ神のまいまいず井戸、福生市の清岩院の池、あきる野市の阿岐留神社の井戸などの下り井が知られている。これらの井戸は中世に設けられた井戸とされていたが、今回の調査の結果、新町の大井戸は1614年に設けられたことが明らかになり、また五ノ神のまいまいず井戸は、鎌倉時代ではなく、1649年から1703年までの間に設けられたことが明らかになった。さらに阿岐留神社の井戸は明治10年代以降に設けられた。
- (3) 井戸はほとんどの場合、清浄な生活用水を得るための施設であるが、城郭の一部には、防火用水を得るための施設があることを松山城・平城などで明らかになった。
- (4) 「井戸」は家屋、あるいは集落をともなって存在することは当然であるが、そこに掘られるようになった理由、あるいはどのように利用されて来たかについては、ほとんど関心が持たれていない。本研究は井戸の位地と地質・地形との関係、井戸水（不圧地下水）の経年変化、井戸の掘削時代と当時の掘削技術などを明らかにした。

千田文子（府中市立四谷小学校教頭）

「多摩川の自然を生かした教材化の研究—小学校『総合的な学習の時間』を通して—」

本研究では、本校の地の利を生かし、児童の視野で多摩川の自然環境や人文・社会環境を見つめさせる活動を行い、これらを踏まえた教材研究を行ってきた。つまり既成の、かつ他からの一方通行的に用意された教材を試して実践するのではなく、多摩川と児童が直接接して得たものから“生きた教材”作りを行うことをねらいとした研究である。

そこでまず、児童が多摩川への興味・関心をもつため、多摩川に数多く触れる活動を組み立て、実践した。それらの活動を経ることにより、児童は多摩川というフィールドをより身近に感じ始めた。その後は、児童自らが追求していきたい課題を自分で決定し、継続して、観察・調査・記録、調べ学習を行っていった。その結果をまとめ、保護者や下級生、地域の方へ発表していった。また、校内に成果を掲示し、交流できるスペース作りや保護者による支援体制作りをおこなった。

森岡淳子（生活者の会代表）

「『水みちマップ』をつくるための調査研究と井戸にみる多摩市の昔の暮らし」

普通の市民が6年間にわたり、延べ約200人以上で、ほぼ80件の井戸や湧水のある現場に行き、直接話を聞き、計測し、写真撮影をして、調査票に記録した。

1996年、井戸調査を始めた時には、多摩市でも水みちマップを作成すれば、近隣の市とつなげて、多摩丘陵の大きな水みちマップができるに違いない、府中市や国分寺市や調布市とおなじようなものを作りたいというのが目的であった。

調査をはじめ、その年の12月に「地下に流れる水脈を探ってみよう」と「井戸調査の中間報告会」を開いた。しかし井戸の調査件数が増すにしたがい、水みちの流れが多摩市ではどうもはっきりせず、段々その目的が不可能ではないかと思い始めた。それは多摩ニュータウンの大規模開発により、それまでの丘陵地帯が一変し、地下水の流れが分断されてしまっていて、地下水の流れ出る方向がはっきりつかめなくなっていることが懸念された。

しかし井戸の所有者を一軒一軒訪問することを続けながら、井戸にまつわる話や、お年よりの昔話などを聞くことにより、当初の目的である水みちマップ作成からすこし変わって、調査から見えた多摩の昔の暮らしの記録集になってきた。

調査中に阪神淡路大震災が起き、災害時の飲料水を確保するという目的も新たに付け加え、今ある井戸が使用可能な状態にあるのかなどの関心も加わった。

2002年に調査の集計をはじめ、多摩市の井戸の分布にはかたよりのあることがはっきりした。井戸のたくさんある地区はニュータウン開発がされていない既存地区であった。大規模開発がされたニュータウン地区では、区画整理で残された谷戸にある一部の井戸のみであった。水みちマップはできなくても、私たちの6年間の調査をまとめたという思いで、冊子『多摩の井戸を探して』～井戸調査から見えた昔の暮らし～を作成した。

小坂克信（八王子市立第八小学校教諭）

「用水を総合的な学習に生かす—日野の用水を例として—」

日野市内には、幹線・支線を含めて約170kmの用水が残っている。これを2002年度から施行された小学校の総合的な学習の時間で活用できるよう教材開発を行った。一つ目は、用水を教材として活用する教員にとって必要と思われる情報をまとめた。二つ目は児童向けの教材である。これは、児童が地域の特色のひとつである用水、また、身近な環境である用水に興味・関心を持ち、用水のよさを知ることができるような教材の開発を行った。

(10ページに続く)

多摩川を中心とした首都圏における主要河川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究を募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 清水 仁）は、昭和50年より多摩川を中心に、首都圏における主要河川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な調査や研究を毎年公募してきました。これ迄に442件の調査や研究を助成し384件の研究成果が完成しています。平成17年度も従来と同様、下記により、意欲的で創造的な調査、研究を募集いたします。

1. 研究対象者

学術研究者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- ① 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ② 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③ 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究
- ④ 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

3. 応募方法

当財団所定の申請用紙（返信用切手200円同封してご請求下さい。）に必要事項をご記入の上、学術研究・一般研究いずれかひとつを選択して、ご応募下さい。申請用紙は当財団ホームページからも入手できます。

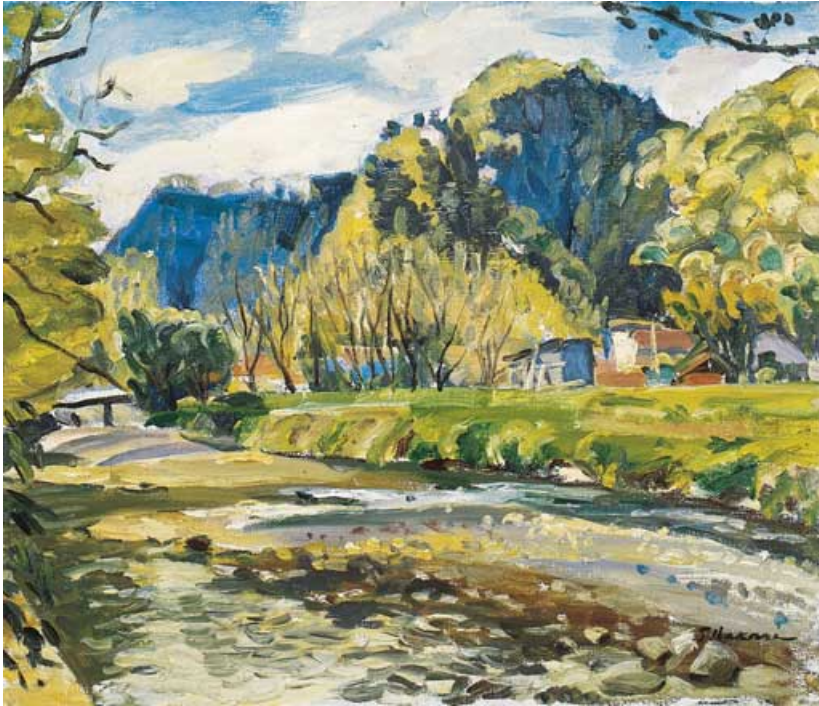
4. 助成の決定 平成17年3月の当財団選考委員会にて選考の上、理事会で決定いたします。

5. 研究の種別

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の性格	環境問題改善のための調査研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査研究で、一般の市民の方が、特別の学識経験を必要としなくても取り組めるもの。
	(財団の過去の事例を参照)	
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	200万円
単年度の助成金上限額	200万円	110万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 原則対象外。ただし、所属機関・個人所有もなく研究に必要不可欠な物品で選考委員会で認められた場合に限る。 (2) 消耗品費 調査研究に用いる各種材料、部品、薬品類等 (3) 旅費 調査研究のための交通費、宿泊費等 (4) 謝金 調査研究のために臨時に雇った人の謝金等 (5) その他 機械・設備などの借料、通信費、その他	

6. 応募締切日 平成17年1月17日(月)

*応募についての詳細は、財団事務局にお問い合わせ下さい。



「陣馬への道」

画家

圖 徹

はかり とおる

鹿児島県生まれ
 太平洋美術学校卒業
 24・27・41年 日展入選
 調布市絵画協会会員
 創元会運営委員

ご協力：財団法人 たましん地域文化財団

(8 ページからの続き)

岡崎弘幸（東京都立久留米高等学校教諭）

「多摩川流域におけるムササビの環境選択に関する研究」

平成 13 年 4 月から平成 15 年 3 月にかけて、多摩川流域における丘陵部を中心としてムササビの生息状況、永山丘陵（青梅市根ヶ布）においてテレメトリー調査、及び生息地・非生息地において環境要因の研究を行った。この結果、東京都多摩地区におけるムササビの分布の東限ラインの概要をつかむことができ、分布の東限ラインは 1998 年と比較して、後退または孤立した地域も見られた。生息地の環境要因では、植生において、スギ（大径木・中小木）・ヒノキ（大径木）・カエデ・ブナ科コナラ属（常緑広葉樹）・ツバキが非生息地より有意に多いことがわかった。また、樹洞数が多いほど生息個体数が多く、生息地の特徴として、樹高が高い・立木密度が密または中・まとまった森林との距離が近い・生息面積が広いということが有意に見られた。

また永山北部丘陵では、行動圏が 33ha（♂）あり、1 日に 3.1～7.8ha の範囲を行動し、最大 1.5km 移動することなどがわかった。

山田半三郎（はむら自然友の会）

「カワラノギクの保護・育成のための実践的調査研究」

関東地方にある河川の中流域に生息するカワラノギクは、かつては、多摩川の府中市、調布市から青梅市東部の範囲でごく普通に見られた。

多摩川流域での生育調査の結果、あきる野市域の多摩川右岸にわずかながら自生地が残っているのみにってしまった。

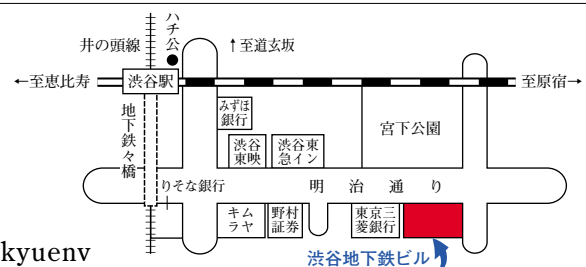
はむら自然友の会では 8 年ほど前から多摩川の河原の一部を借用してカワラノギクを保護・育成してきたが、多摩川をとりまく自然環境は、一向に回復する兆しはなく、ボランティアによる人力以外に対策なしと判断して毎月良好な河原環境の創出を目的に除草を主体とした繁殖活動を行っている。

- 発行日 平成 16 年 12 月 1 日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
 〒150-0002 渋谷区渋谷 1-16-14
 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>



※印刷所 雄文社 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 9-11-1 TEL (048)831-8125